

## 第3節 弥生・古墳時代の調査

### 1 概要

弥生時代から古墳時代にかけては集落が形成されたと考えられる。遺構は西区及び東区C、D、G区の丘陵平坦部の広範囲に及んでおり、東区は後世の削平により遺存状態が悪い。検出した遺構は弥生時代の竪穴建物跡4棟、古墳時代の竪穴建物跡4棟、土坑3基である。

弥生時代の竪穴建物跡は東区の丘陵平坦部から緩やかに下る東斜面にかけて分布し、時期はいずれも弥生時代後期と推定される。とくに丘陵の高所に営まれた竪穴建物1は大型で、集落における中核的な住居跡であったことが想定される。

古墳時代の竪穴建物跡は1棟が西区の斜面肩部に、残り3棟は弥生時代と同じく東区の丘陵平坦部から東斜面にかけて立地している。時期はいずれも古墳時代中期に属するが、その中でやや時期差を持つとみられる。土坑3基の性格については明確ではないものの、墓壙の可能性があり、時期は古墳時代前期と考えられる。

出土遺物は僅少で、遺構に共伴する土器も少ない。なお、遺構外ではあるが、古墳時代の蛇紋岩製勾玉と碧玉製の管玉が出土している。

### 2 竪穴建物跡

#### 竪穴建物1（第100～104図、PL.15・48）

東区D区、I14グリッド、標高71.5mの丘陵平坦部に位置する大型の竪穴建物跡である。東半は遺存状態が悪く、壁面や壁溝も削平されている。建替えが一度みられ、床面積を大きく拡張している。古い方を竪穴建物1（古）、新しい方を竪穴建物1（新）とし報告する。

#### 竪穴建物1（古）

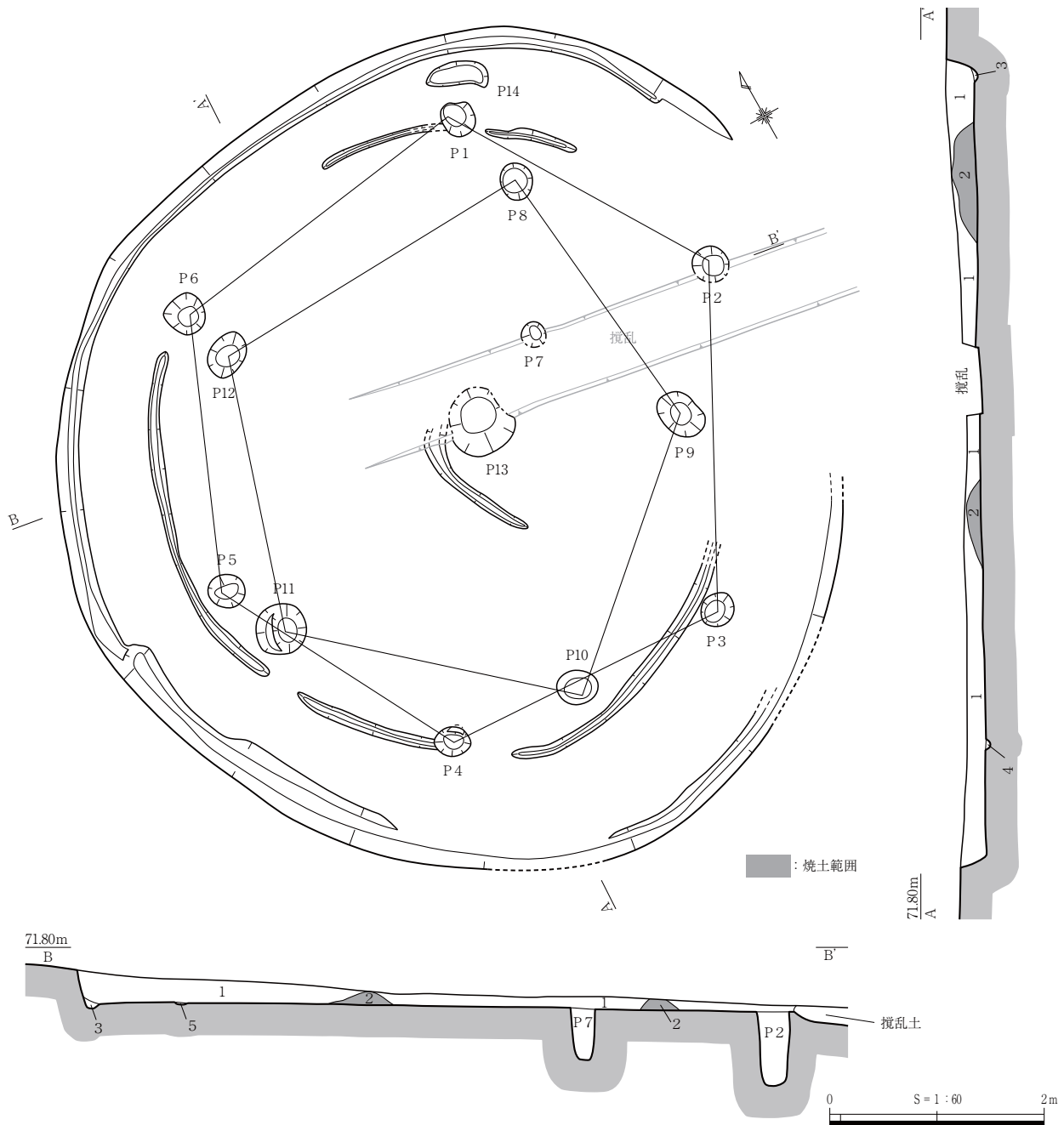
平面形は壁溝の形状から多角形を呈する可能性がある。規模は長軸5.8m、短軸5.5m前後、床面積は28㎡前後と推定され、拡張前は竪穴住居として一般的な規模であったと考えられる。壁溝は幅10cm、深さ3～5cmで、断続的に巡っている。

主柱穴はP8～P12の5基からなり、五角形に配置されている。柱間寸法はP8-P12間のみがやや長く3mとなるが、残りはすべて2.7m前後を測る。柱掘方は径30～50cmの円形で、深さはP10を除き、50～80cmと比較的深い。柱の径は断面観察から20cm前後に復元される。

#### 竪穴建物1（新）

大型の竪穴建物跡で、最終的に焼失し廃絶している。平面形は多角形を呈すると考えられ、規模は長軸7.85m、短軸7.3mを測る。床面積は約52㎡と推定され、古段階の床面積を約1.8倍に拡張している。壁高は最大で25cm遺存しており、壁際には幅10～15cm、深さ3～7cmの壁溝が巡っている。

主柱穴はP1～P6までの6基からなり、六角形に配置されている。柱間寸法はP1-P6間が3.1m、P2-P3間が3.2mとやや広く、他は2.6mないしは2.7mを測る。柱掘方は径30～40cmの円形を呈し、深さは60～80cmと深い。P1では炭化した柱材No.2001が立ったままの状態出土しており、径は18cmを測る。他の柱径は平断面観察により10～15cmに復元される。P13はいわゆる中央ピットで、長軸70cm、短軸60cmの楕円形を呈し、浅い溝が南へと僅かに派生している。また、P1と壁溝の間には長軸50cm、短軸20cmの長細いP14がみられ、内部に拳大の礫が3個並べたような状態で出土し

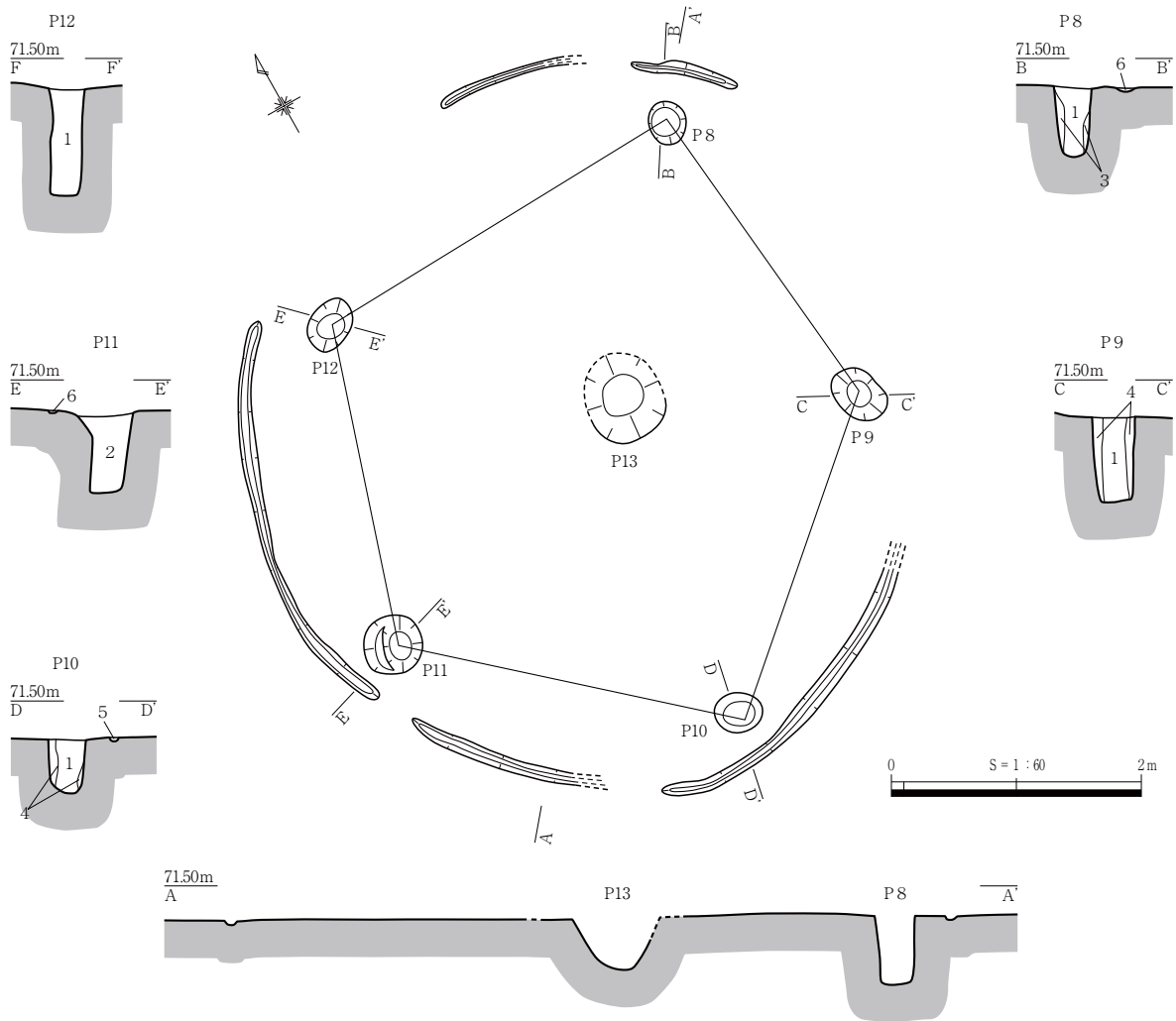


- 1 黒褐色土 (7.5YR3/2) しまり・粘性やや弱。径1cm以下の炭化材・ATブロック含む。
- 2 褐色土 (7.5YR4/3) しまりやや強、粘性やや弱。径1cm以下の焼土ブロック非常に多く含む。
- 3 黒褐色土 (7.5YR3/2) しまり・粘性弱。径1cm以下の焼土・ロームブロック含む。炭粒含む。
- 4 黒褐色土 (7.5YR3/2) 径1cm以下のATブロック・ホワイトロームブロックの混土。しまり・粘性弱。
- 5 褐色土 (7.5YR4/3) しまり弱、粘性強。

第100図 竪穴建物 1

ているが、その性格は不明である。

焼失に伴う焼土層は北壁に沿って帯状に確認された。焼土層の幅は1 m程で、最大24cmの厚みで堆積している。この焼土層は炭化材の出土範囲とも重なっており、炭化材に厚く覆い被さる出土状況からみて、上屋が土屋根の構造であった可能性が高い。出土した炭化材のうち、No. 682は径20cm前後の太い丸太材で、P1-P6の柱筋に沿って出土していることから桁（梁）材と考えられる。No. 673、678、679、685も太めの丸太材とみられ、方向性から桁（梁）材の可能性が高いであろう。それに対して、No. 814、818、821、823などは建物の中心に向かって放射状に倒れ込んでいることから



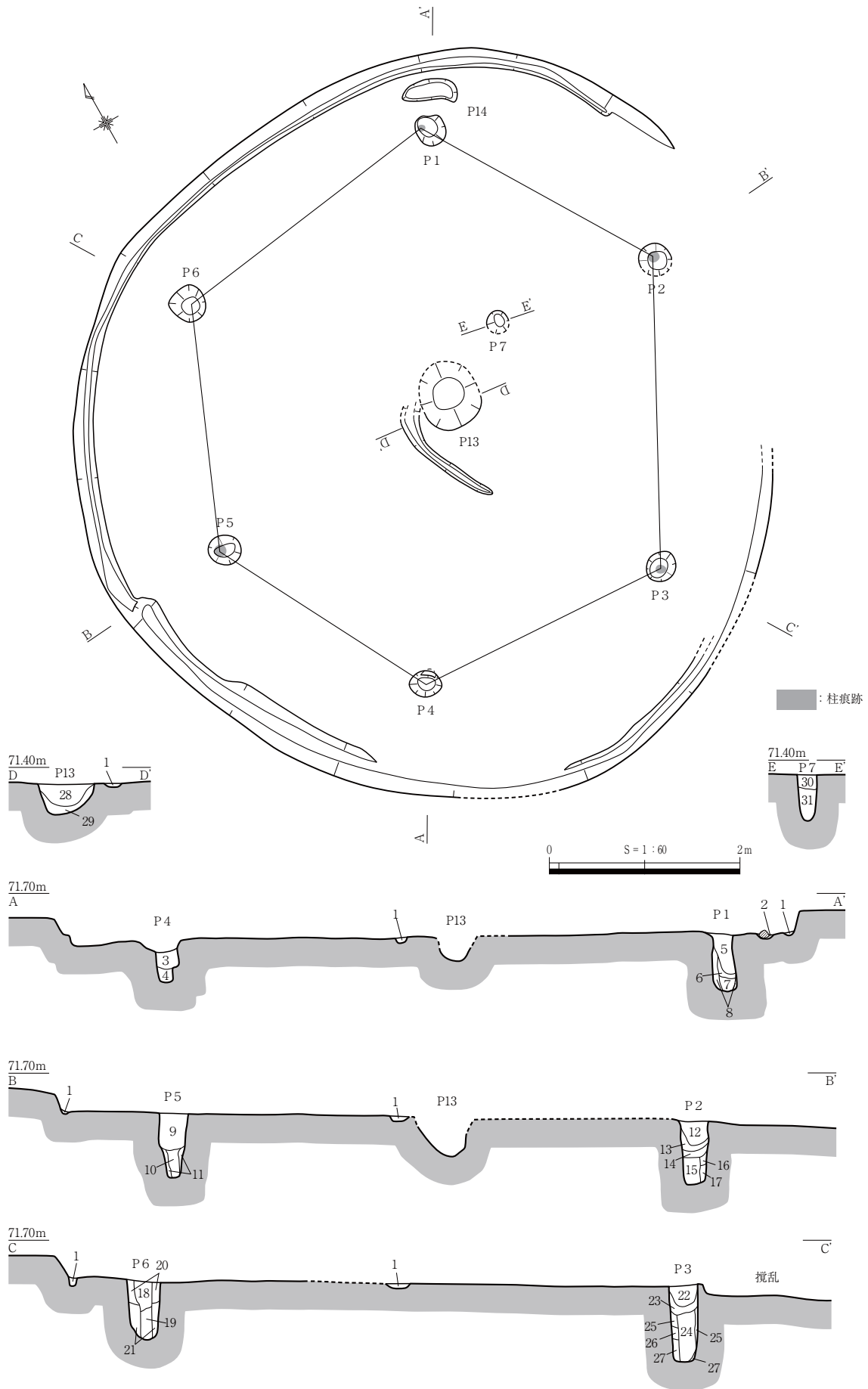
- 1 黒褐色土 (7.5YR3/2) しまり弱、粘性強。径5cm以下のATブロック非常に多く含む。P8～P10・P12 柱痕跡
- 2 にぶい黄褐色土 (10YR5/4) しまりやや強、粘性強。径3cm以下のホワイトローム・ATブロックとの混土。ブロック状を維持する。P11 柱痕跡
- 3 灰褐色土 (7.5YR4/2) しまり弱、粘性強。径5mmのATブロック含む。
- 4 明褐色土 (7.5YR5/6) しまりやや弱、粘性強。ハードローム・ホワイトローム・ATとの混土。ブロック状ではない。
- 5 黒褐色土 (7.5YR3/2) と径1cm以下のATブロック・ホワイトロームブロックとの混土。しまり弱、粘性弱。
- 6 褐色土 (7.5YR4/3) しまり弱、粘性強。

第101図 竪穴建物1(古)

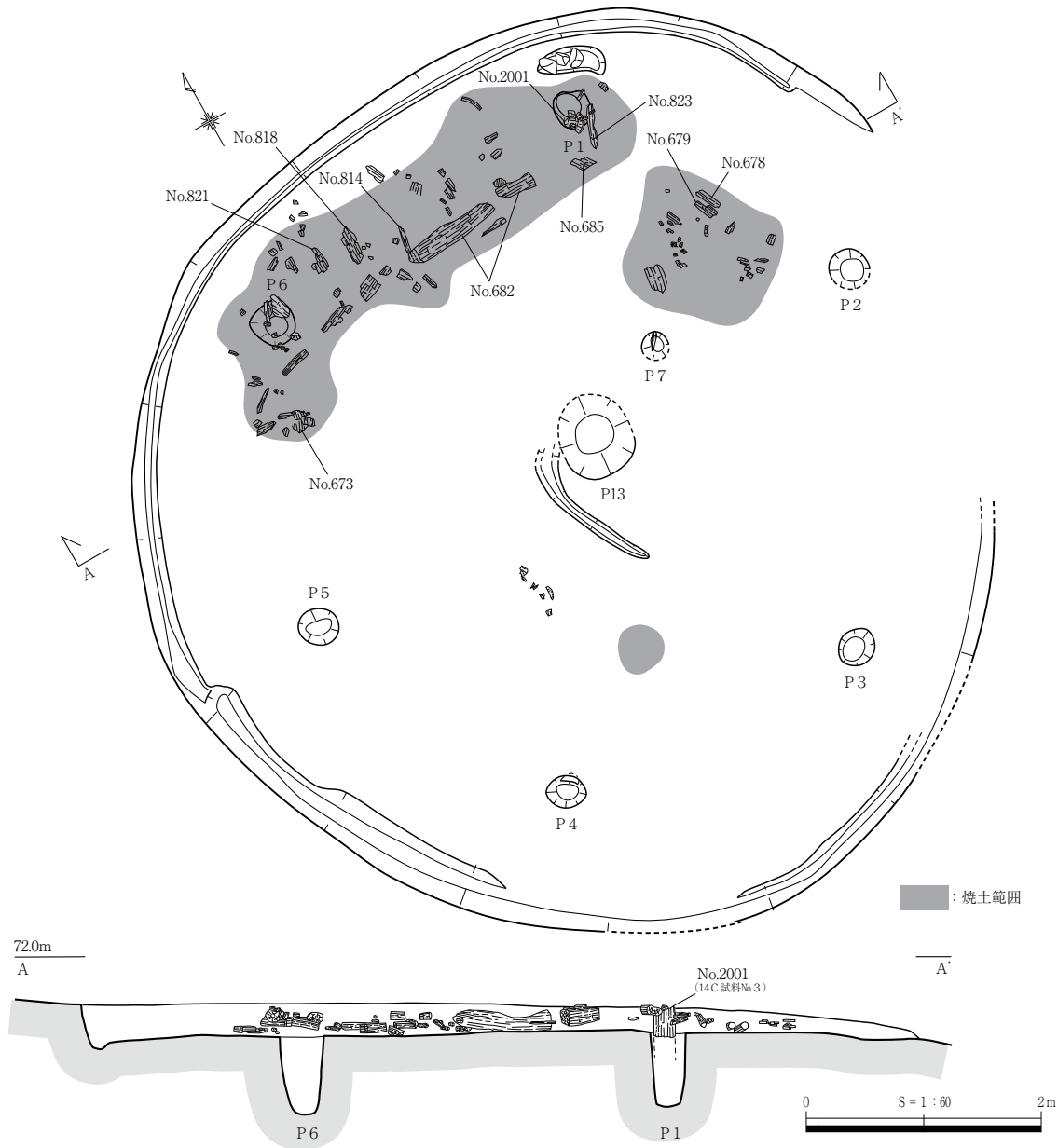
垂木材と推定される。樹種は同定の結果、柱材にクスノキ、梁(桁)材にヤマグワ、ユクノキ、スダジイ、垂木材にはクリ、ユクノキが用いられていることが判明している(第4章第1節)。

遺物は埋土及び焼土層から弥生土器が少量出土している(386～393)。386～392は甕の口縁部である。393は鉢であろうか、胴部に大きめの刺突文が巡っている。J1は管玉で、緑色凝灰岩製である。なお、394～396は本遺構の周辺から出土した資料ではあるが、本来は竪穴建物1に帰属する可能性をもつためここで掲載している。

本遺構の時期は出土遺物から弥生時代後期中葉(V-2)と考えられる。また、新段階の柱穴P1に遺存していた柱材を放射性炭素年代測定したところ、 $2\sigma$  暦年代範囲で107calBC-53calAD(95.4%)という結果が得られている(第4章第1節)。

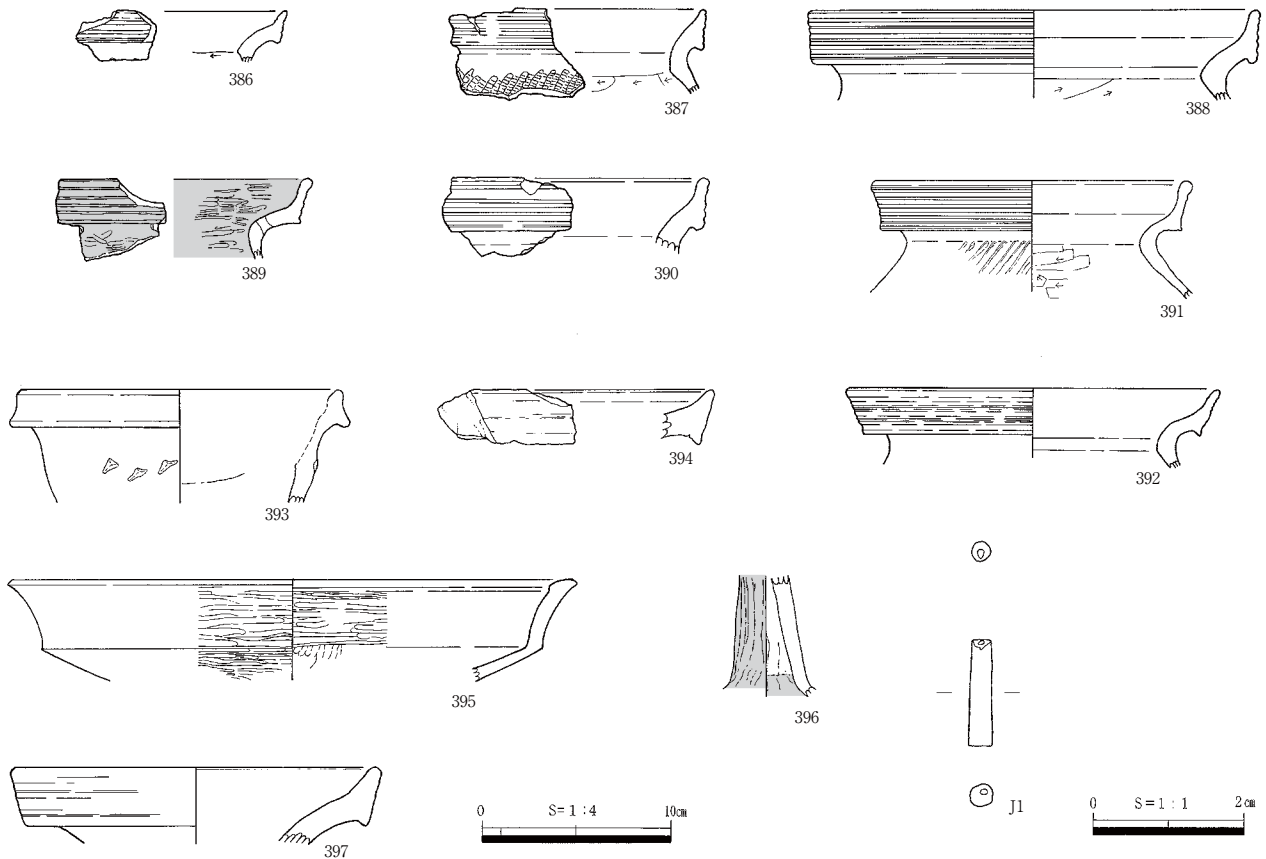


第102図 竪穴建物1(新)



第103図 竪穴建物1(新)炭化材出土状況

- 1 黒褐色土 (7.5YR3/2) しまり・粘性弱。径1cm以下の焼土・ロームブロック含む。炭粒含む。
- 2 黒褐色土 (7.5YR3/2) しまり・粘性弱。径1cm以下のロームブロック含む。
- 3 黒褐色土 (7.5YR3/2) しまりやや強、粘性強。径5mm以下のハードロームブロック多く含む。炭粒含む。
- 4 黒褐色土 (7.5YR3/2) しまり弱、粘性強。ローム土粒含む。
- 5 褐色土 (7.5YR4/4) しまり非常に弱、粘性やや弱。径1cm以下の焼土・ロームブロック非常に多く含む。炭粒非常に多く含む。
- 6 にぶい褐色土 (7.5YR5/4) しまり弱、粘性強。ホワイトロームブロック土。8層の崩落土か。
- 7 褐色土 (7.5YR4/3) 粘性弱、しまり強。炭化した有機物含む(焼けた炭ではない)。**P1柱痕跡**
- 8 明褐色土 (7.5YR5/6) しまり強、粘性強。ローム土(ブロック状ではなく均質化している、ハードローム由来)。
- 9 黒褐色土 (7.5YR3/2) しまりやや強、粘性強。径1cm以下のホワイトローム・ハードロームブロック多く含む。炭粒含む。
- 10 灰褐色土 (7.5YR4/2) しまり弱、粘性強。径5mm以下のハードロームブロック・土粒多く含む。炭粒含む。**P5柱痕跡**
- 11 明褐色土 (7.5YR5/6) しまり・粘性強。ハードローム・ホワイトローム由来土。均質化する。
- 12 黒色土 (7.5YR2/1) しまり・粘性弱。径5mm以下のATブロック粒含む。
- 13 黒褐色土 (7.5YR3/2) しまり弱、粘性やや強。径1cm以下のハードローム・ホワイトロームブロック多く含む。
- 14 13層と橙色 (7.5YR6/6) ロームブロック混土。しまり弱、粘性やや強。径2cm以下のハードローム・ホワイトロームブロック非常に多く含む。
- 15 黒褐色土 (7.5YR3/2) しまり非常に弱、粘性強。φ5mm以下のハードローム・ホワイトロームのブロック・土粒多く含む。
- 16 にぶい褐色土(7.5YR5/3)しまりやや強、粘性強。ハードロームと黒褐色土の混土。粒径1cm以下。
- 17 明褐色土 (7.5YR5/6) しまり強、粘性強。ハードローム由来。ブロック状(それほど均質化していない)。
- 18 黒褐色土 (7.5YR3/2) しまり非常に弱、粘性やや弱。径1cm以下のAT・ホワイトロームブロック、焼土粒・炭粒非常に多く含む。
- 19 褐色土 (7.5YR4/3) しまり非常に弱、粘性強。径5mm以下のハードロームブロック多く含む。
- 20 にぶい褐色土 (7.5YR5/4) しまりやや強、粘性強。ホワイトローム・AT・ハードロームブロックの混土。焼土粒・炭粒多く含む(二次流入か)。
- 21 明褐色土 (7.5YR5/6) しまりやや強、粘性強。ハードローム由来、ブロック状。
- 22 黒色土(7.5YR2/1)しまり弱、粘性弱。径5mm以下のATブロック・焼土ブロック・炭粒多く含む。
- 23 黒褐色土 (7.5YR3/2) しまり弱、粘性やや強。径1cm以下のAT・ホワイトロームブロック非常に多く含む。
- 24 黒褐色土 (7.5YR3/2) しまり非常に弱、粘性強。径5mm以下のハードロームブロック含む。**P3柱痕跡**
- 25 褐色土 (7.5YR4/4) しまりやや強、粘性強。ハードローム由来土。ブロック状(それほど均質化していない)。
- 26 灰褐色土 (7.5YR4/2) しまりやや弱、粘性強。ロームと黒色系土の混土。
- 27 明褐色土 (7.5YR5/6) しまりやや強、粘性強。ハードローム由来土。均質。
- 28 黒色 (7.5YR2/1) しまり弱、粘性強。径5mm以下のAT・ホワイトロームのブロック・土粒含む。
- 29 黒褐色土(7.5YR3/2)しまりやや強、粘性強。径1cm以下のホワイトロームブロック非常に多く含む。
- 30 褐色土 (7.5YR4/3) しまり・粘性弱。焼土粒・炭粒・AT土粒多く含む。
- 31 黒褐色土 (7.5YR3/2) しまり弱、粘性強。径1cm以下のハードロームブロック非常に多く含む。



第104図 竪穴建物1 出土遺物

**竪穴建物2** (第105・106図、PL.17-1・2)

東区D区、H13グリッド、標高71.4mの緩斜面に位置する小型の竪穴建物跡である。後世の削平により遺存状態が悪く、南東側の壁面は遺存していない。

平面形は径4.4mの円形を呈し、床面積は約25㎡を測る。壁高は最大15cmで、壁際に沿って幅8～10cm、深さ5cmの壁溝が全周していたと考えられる。

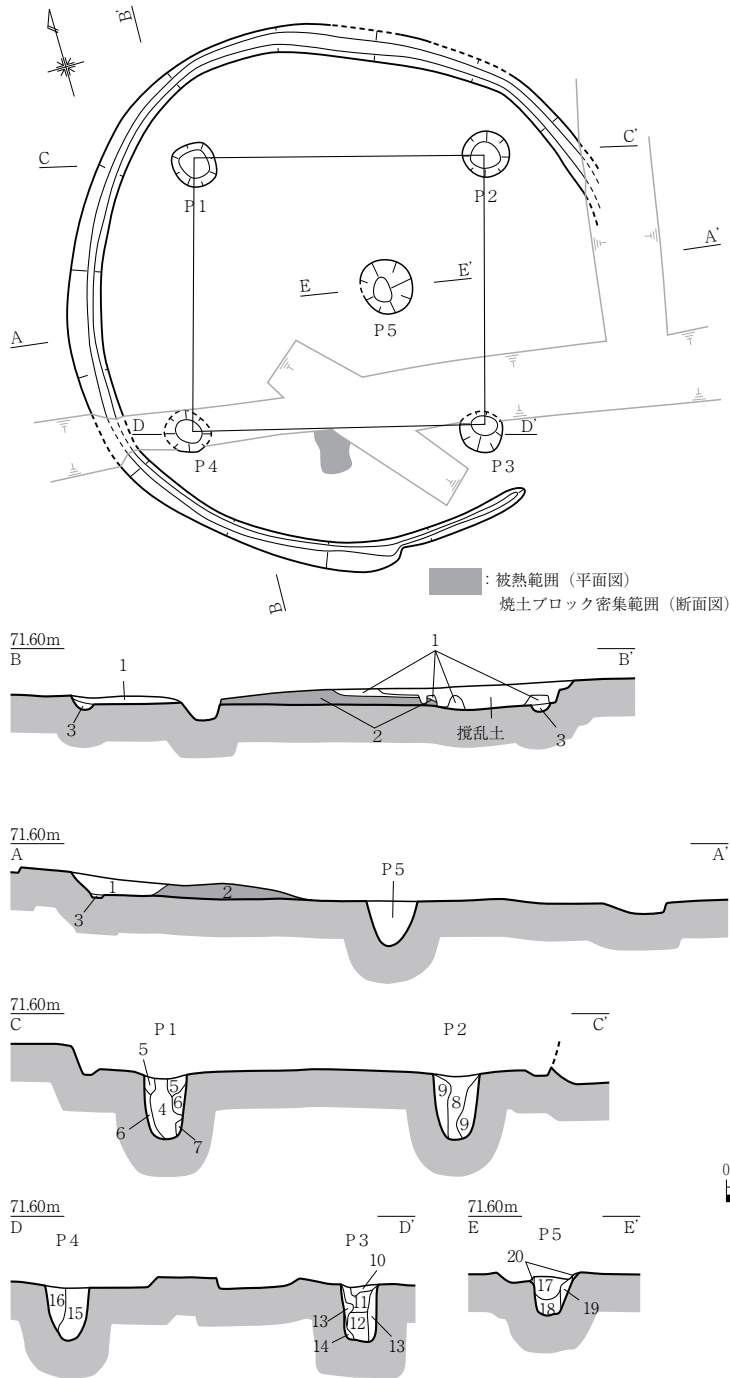
支柱穴はP1～4の4基からなり、柱間寸法は桁行が2.3m、梁行が2.1mを測る。柱掘方は径30～40cmの円形を呈し、深さは40～50cmである。断面観察により柱の径は15～20cmと推定される。P5はいわゆる中央ピットで、建物中央やや左寄りに設けられている。平面形は径43cmの円形で、深さは36cmを測る。また、南側の床面で炉跡とみられる焼土面を1箇所確認している。

床面では炭化材が少量ながら散在した状態で出土している。炭化材はほとんどが細片となっており、上屋の部材を特定するまでには至らない。また、建物西寄りの範囲では径1mの範囲で焼土ブロックを密に含む堆積層(2層)が確認された。これらの点から本遺構は焼失住居の可能性が高く、床面での出土遺物がないことから屋内を片付けた後、意図的に焼失させたと考えられる。

出土遺物は僅かに弥生土器片が出土しているが、詳細な時期は特定できない。ただし、床面から出土した炭化材1点を放射性炭素年代測定したところ、2σ暦年代範囲で1calAD-92calAD(87.4%)という結果が得られている。

したがって、建物の平面形態や周囲の遺構状況も勘案すると弥生時代後期跡の竪穴住居と考えられ





- 1 黒褐色土 (10YR3/2) しまり・粘性弱。  
径5mm以下のソフトローム・ATブロック、及び焼土・炭化物粒多く含む。
- 2 暗褐色土 (10YR3/3)～褐色 (7.5YR4/6) 焼土ブロック密集部。径1cm以下の焼土ブロック・焼土粒、大型炭化材・炭粒非常に多く含む。
- 3 暗褐色土 (10YR3/3) しまりやや強、粘性やや弱。径1.5～2cmのATブロック多く含む。
- 4 暗褐色土 (10YR3/3) しまり・粘性普通。径3cm以下のソフトロームブロック含む。
- 5 暗褐色土 (10YR3/3) しまり強、粘性普通。径0.5～1cm程のソフトローム粒多く含む。
- 6 褐色土 (10YR4/4) しまり・粘性やや強。径1cm程のソフトロームブロック多く含む。
- 7 褐色土 (10YR4/6) 粘性やや強、しまり普通。地山に酷似するが、やや暗い。
- 8 黒褐色土 (10YR2/2) しまり・粘性普通。径1cmの炭・ロームブロック含む。
- 9 褐色土 (7.5YR4/4) しまりやや弱、粘性やや強。地山に酷似するが、やや暗い。
- 10 暗褐色土 (10YR3/3) しまりやや強、粘性やや弱。径2cm以下のATブロック多く含む。3層に類似。
- 11 褐色土 (10YR4/6) しまり・粘性普通。径5mmのAT・ハードローム粒、径1cm以下の炭多く含む。
- 12 暗褐色土 (7.5YR3/3) しまりやや弱、粘性やや強。径1cmのATブロック、径0.5cmの焼土粒・炭粒含む。
- 13 褐色土 (10YR4/4) しまり・粘性やや強。径5mmのAT粒多く含む。
- 14 褐色土 (7.5YR4/4) しまり・粘性やや強。地山に酷似するが、やや暗い。
- 15 暗褐色土 (10YR3/3) しまり・粘性普通。径1cm以下のハードロームブロック・炭多く含む。
- 16 暗褐色土 (10YR3/4) しまり・粘性普通。径5mmの炭粒少し含む、径1cm程のソフトロームブロック多く含む。
- 17 黒褐色土 (10YR2/2) しまり・粘性やや弱。径1mm程の炭粒、径5mm以下のAT粒多く含む。
- 18 暗褐色土 (10YR3/3) しまり・粘性やや弱。径1mm程の炭粒、径5mm以下のAT・ハードローム粒多く含む。
- 19 褐色土 (7.5YR4/4) しまりやや弱、粘性普通。地山に酷似する。
- 20 暗褐色土 (10YR3/3) しまり強、粘性普通。径5mm以下の炭粒・焼土粒、径5mm以下のAT粒含む。

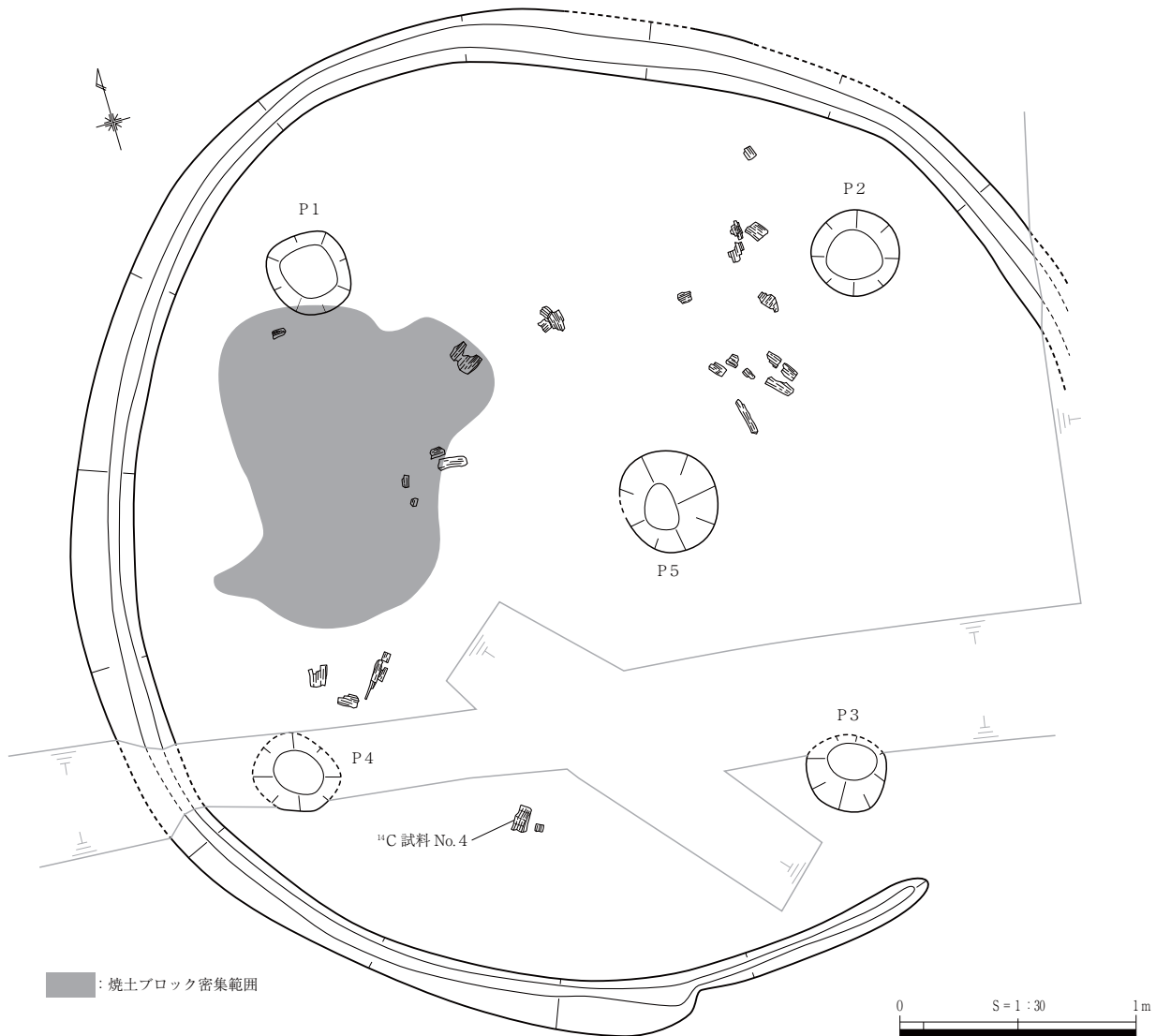
第105図 竪穴建物2

よう。

竪穴建物3 (第107図、PL.16・17-3)

東G区、G9グリッド、標高67.0mの緩斜面に位置する竪穴建物跡である。トレンチャーの耕作痕などによる後世の削平が著しく、西側の壁面を僅かに残すのみで、大部分は壁溝を部分的に検出するに留まった。

平面形は円形、または隅丸方形とみられるが、明確ではない。規模は長軸5.0m、短軸4.7m前後と推定される。床面積は20㎡前後に復元され、壁高は最大20cm遺存している。壁沿いには幅10cm、深さ5cm前後の壁溝が部分的に巡っていたと考えられる。埋土は黒褐色土である。床面も自体も削平されている部分が多く、貼床や炉跡の有無は明らかにしえない。



第106図 竪穴建物2炭化材出土状況

主柱穴はP1～P4の4基からなり、柱間寸法は桁行2.3m、梁行2.0mを測る。柱掘方は35～45cmの円形を呈し、深さは50～55cmである。柱の径は断面観察から15～20cm前後と推定される。P5はいわゆる中央ピットで、円形を呈し、径42cmとやや小型である。P6も建物に伴うとみられるが、性格は不明である。

出土遺物は図化していないが、弥生土器片が僅かに出土している。詳細な時期は特定できないが、建物跡の平面形態や周囲の遺構状況を勘案すると、弥生時代後期の竪穴住居跡と考えられる。

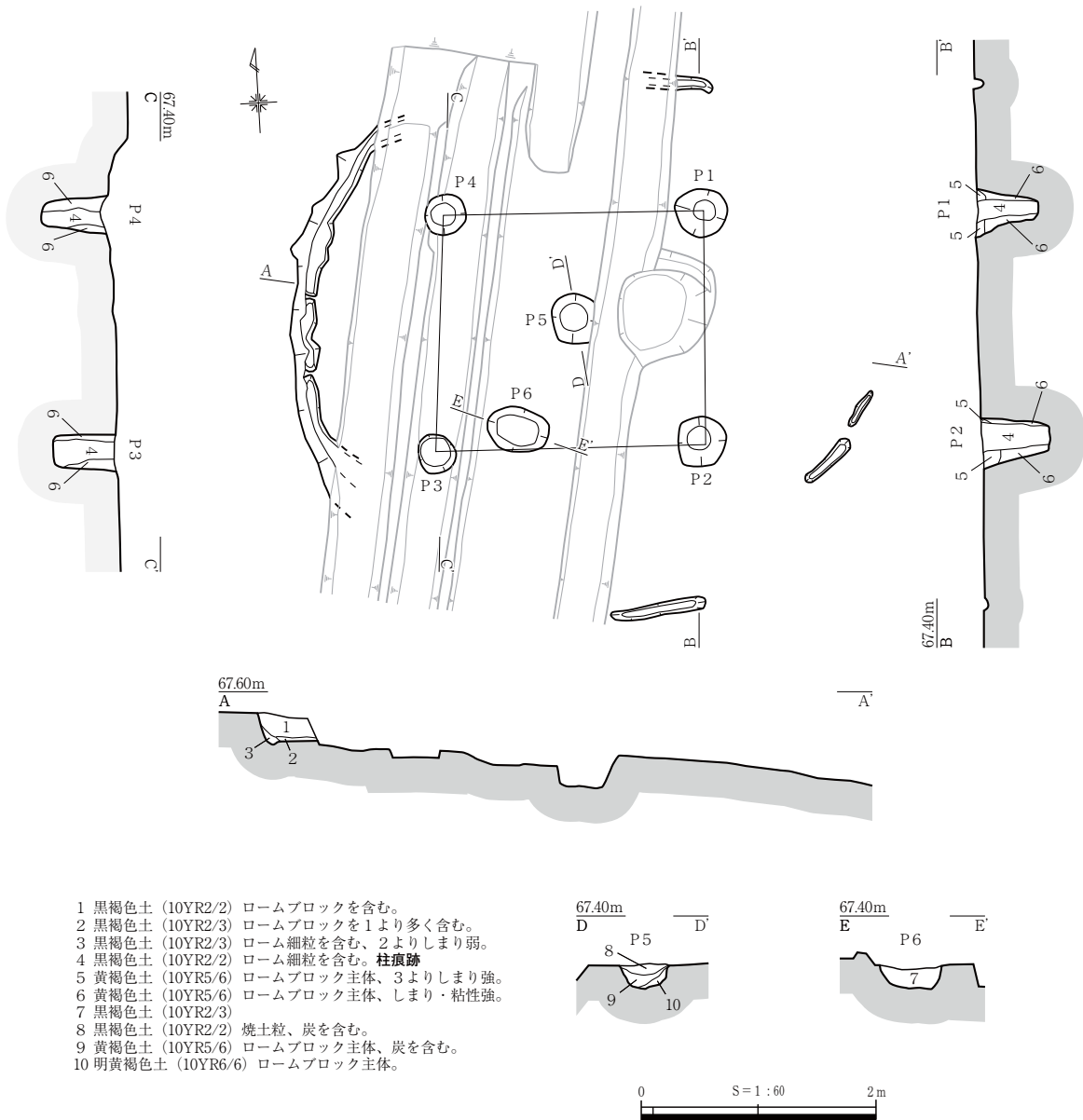
#### 竪穴建物4 (第108・109図)、PL.18・47-2～5・48・59-5,6)

東区G区、H10グリッド、67.4mの緩斜面に位置する小型の竪穴建物跡である。トレンチャーなどによる後世の削平が著しく、東半は壁面や周壁溝も遺存していない。

平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸3.7m、短軸3.3m前後と推定される。床面積は10㎡前後で、壁高は最大30cm遺存している。壁沿いには幅15cm、深さ5cm程の壁溝が巡っており、北壁の壁溝内には3基の小ピットが並んで確認された。床面では炉跡や貼床は確認されていないが、東半の床面が削平を受け遺存していない点を考慮する必要がある。

主柱穴はP1～P4の4基からなり、柱間寸法は桁行、梁行とも2.3m前後である。柱掘方は35





第107図 竪穴建物3

～40cmの円形で、深さは50cmほどである。柱の径は平・断面観察から20cm前後と推定される。P5はいわゆる中央ピットで、長軸45cm、短軸35cmの方形を呈する。深さは16cmで、埋土上層（5層）には炭化物を多く含んでいる。

出土遺物はP4南西の壁際で、完形に近い弥生土器が3個体まとまって出土している。403は埋土2層から出土し、401、404は床面から出土している。403は小型の高杯で、内外面は赤色塗彩されており、丁寧なヘラミガキが施される。404は小型の水差形土器で、完形品である。外面調整は風化のため不明瞭だが、口縁部の内面には丁寧なヘラミガキが施される。401は小型の壺で、胴部下半を欠く。頸部に蓋用の穿孔がある。この他に床面直上や柱穴内から鉄製品が7点出土している。いずれも破片資料で、器種を特定しえないものが多いが、F2は平面形が五角形を呈する無茎鏃と考えられる。また、図化していないが、P1の柱痕跡から軽石が2点出土しており、いずれも平滑面がみられ、砥石として使用された可能性が考えられる。

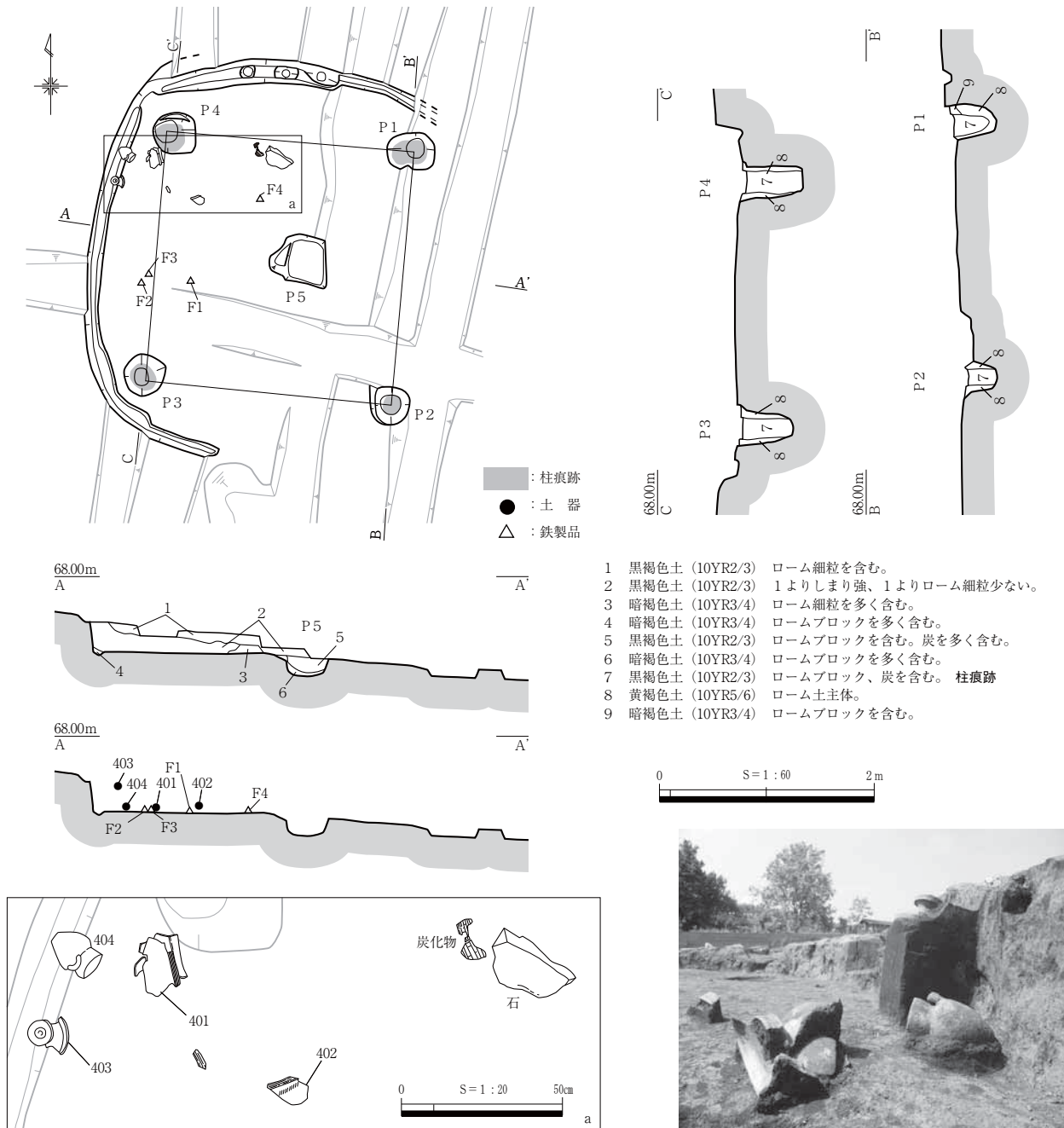


写真1 竪穴建物4遺物出土状況

第108図 竪穴建物4

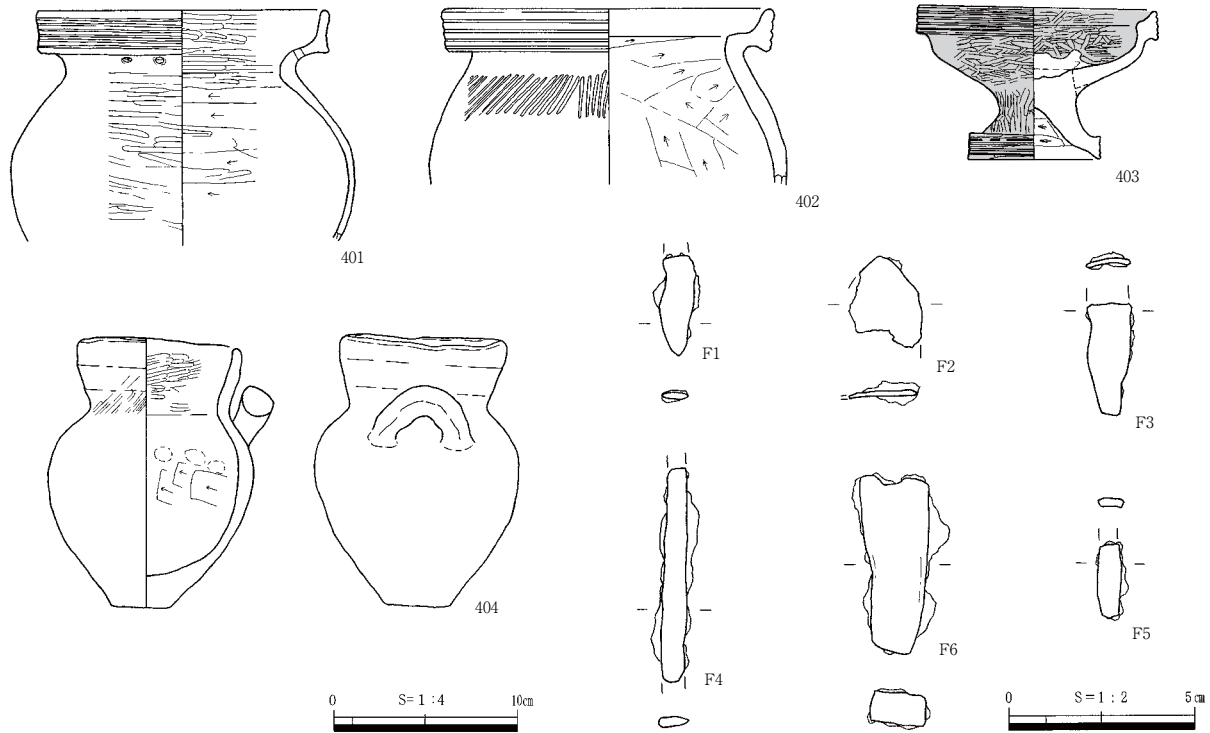
本遺構の時期は出土遺物から弥生時代後期中葉（V-2）と考えられる。

竪穴建物5（第110・111図、PL.19-1・49-1,2・50-1）

東区D区、D 5・6、E 5・6グリッド、標高 65.9 mの緩斜面に位置する。確認調査の段階で検出され、「SI 1」として報告された竪穴建物跡である。遺構は著しく削平を受け遺存状態が悪く、東半は壁溝のみの検出となった。

平面形は方形を呈し、規模は南北辺が 5.9 m、東西辺が 5.1 mと南北辺がやや長い。床面積は約 27.5㎡を測る。壁高は最大 20cm遺存しており、壁際には幅 10cm、深さ 3～5 cmの壁溝がほぼ全周している。

主柱穴は建物中央に配置された P 1、2の2基からなり、柱間寸法は 1.9 mを測る。柱掘方は円形を呈し、規模は P 1が径 29cm、深さ 73cmで、P 2が径 40cm、深さ 65cmである。断面観察により柱の



第109図 竪穴建物4出土遺物

径は16～20cm前後と推定される。また、建物中央、支柱穴P1とP2の間で炉跡とみられる焼土面を1箇所確認している。

出土遺物は少ないが、埋土から土師器が出土している。405～407は下層（2層）から出土し、405、406は甕の口縁部、407は小型丸底壺である。409は甑形土器で、上層（1層）を中心に、建物西側の埋土に散乱した状態で出土している。408はミニチュア土製品で、埋土に入り込んだ木根の攪乱土から出土した資料であるが、本来は本遺構に帰属する遺物とみて間違いはないであろう。鏝を持ち、羽釜を模した資料と考えられる。

遺構の時期は出土した下層から出土した土師器が天神川Ⅵ～Ⅶ期に比定されることから、古墳時代中期と考えられる。また、建物南西隅の床面から出土した炭化材1点を放射性炭素年代測定したところ、 $2\sigma$  暦年代範囲で317calAD-409calAD（72%）という結果が得られ、土器の年代観とは齟齬が認められる。

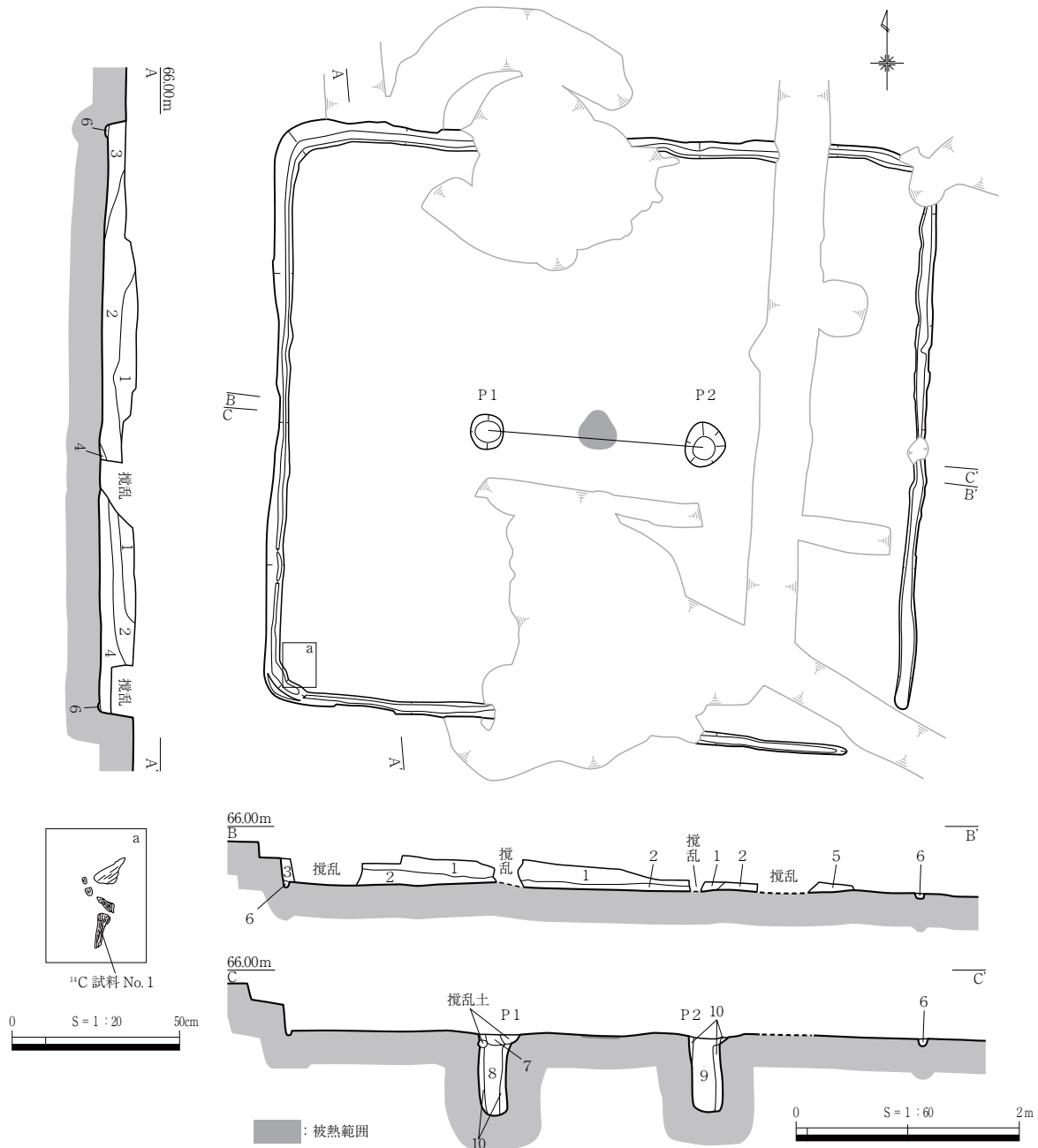
本遺構は埋土下層の2層に焼土ブロックを多く含み、また、柱穴内にも焼土粒が含まれることから、焼失住居跡である可能性が高い。

#### 竪穴建物6（第112・113図、PL.20-1,2・49-3,4）

東区D区、I16グリッド、標高72.1mの丘陵平坦部に位置する小型の竪穴建物跡である。東側の床面の一部が削平されている。平面形はほぼ方形を呈するが、南北辺が3.5m、東西辺が3.2mと南北辺が僅かに長い。床面積は約9㎡を測る。壁高は最大で30cmで、壁際には幅10cm、深さ5～10cmの壁溝が全周している。埋土は黒褐色土が主体である。

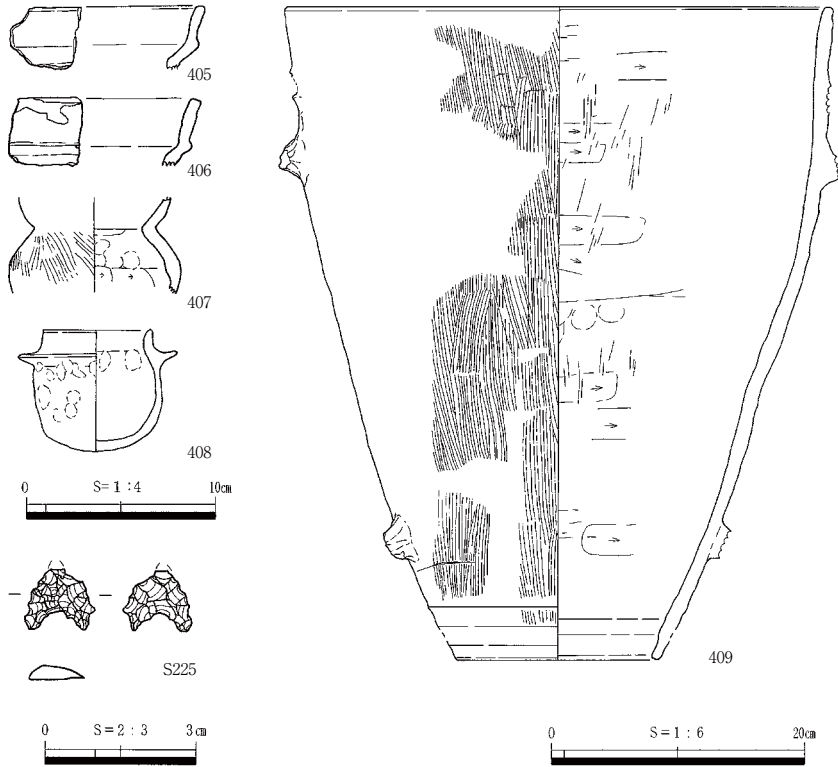
上屋構造は柱穴が無いことから、壁立となる可能性が高い。建物中央のP1はいわゆる通常の中央ピットとは異なり、内部から一辺25cmの扁平な台石が据えられた状態で出土している。表面に敲打痕や擦痕、被熱痕等は確認できなかったが、何らかの作業台として使用された可能性が高い。

遺物は土師器が少量出土している。410はP1に隣接するように底面から10cm程浮いた状態で出

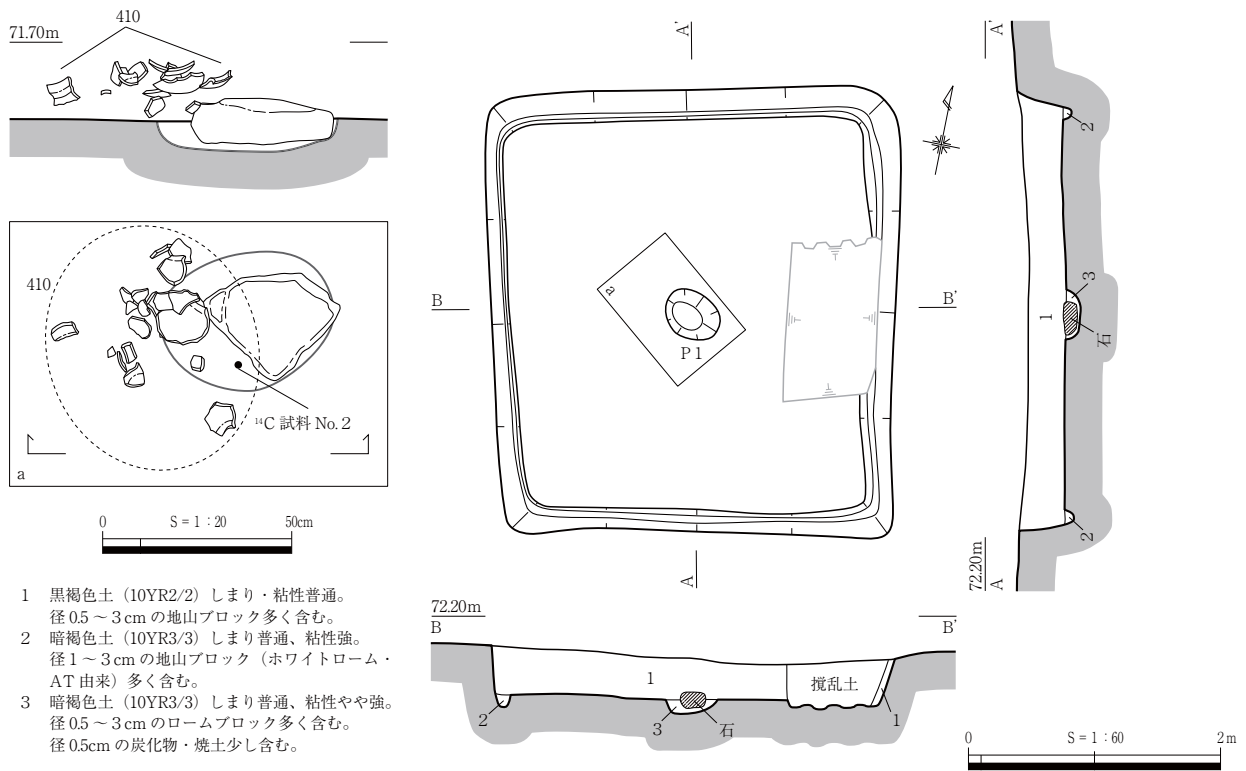


- 1 黒褐色土 (10YR2/2) しまり・粘性やや弱。径1cm以下の炭含む。
- 2 暗褐色土 (10YR3/3) しまり・粘性普通。径2cm以下の炭・ロームブロック・焼土ブロック多く含む。
- 3 黄褐色土 (10YR5/6) しまり・粘性普通。径1cm程の炭・ロームブロック含む。径5mmのローム粒非常に多く含む。
- 4 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり・粘性普通。径5mm程のローム粒非常に多く含む。径1cm以下の炭多く含む。
- 5 灰黄褐色土 (10YR4/2) しまりやや強、粘性やや弱。径5mm以下のローム粒非常に多く含む。
- 6 暗褐色土 (10YR3/3) しまり・粘性普通。径5mm以下の炭粒・ローム粒・焼土粒非常に多く含む。
- 7 黒褐色土 (10YR2/2) しまり・粘性普通。径5mm以下の炭粒・ローム粒含む。
- 8 暗褐色土 (10YR3/3) しまり・粘性普通。径5mm以下の炭粒・焼土粒、径1cm程のロームブロック多く含む。**P1柱痕跡**
- 9 暗褐色土 (10YR3/3) しまり・粘性普通。径5mm以下の炭粒・焼土粒、径1~2cmのロームブロック多く含む。  
径3~5cm程の黒褐色土ブロック含む。**P2柱痕跡**
- 10 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 径1~5cmのロームブロックを多く含む。径0.5cm以下の炭粒・焼土粒を含む。しまりやや強、粘性普通。

第110図 竪穴建物5



第111図 竪穴建物5出土遺物



第112図 竪穴建物6

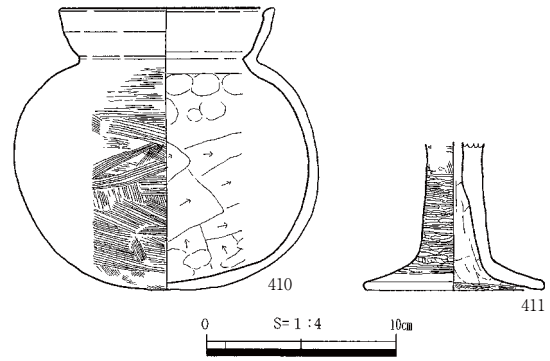
### 第3章 調査の成果

土している。小型の布留系甕で、口縁部端部は内側へ肥厚し、内面肩部には指頭圧痕が残る。411は高杯の脚部で、外面には丁寧なヘラミガキが施される。時期は出土した土師器が天神川Ⅵ～Ⅶ期に比定されることから、古墳時代中期と考えられる。なお、P 1上層から出土した炭化物1点を放射性炭素年代測定したところ、 $2\sigma$ 暦年代範囲で131calAD-260calAD (72.0%)という結果が得られた。土器の年代観と矛盾するが、建物の平面形態などを含め考古学的な年代観の方が妥当であろう。

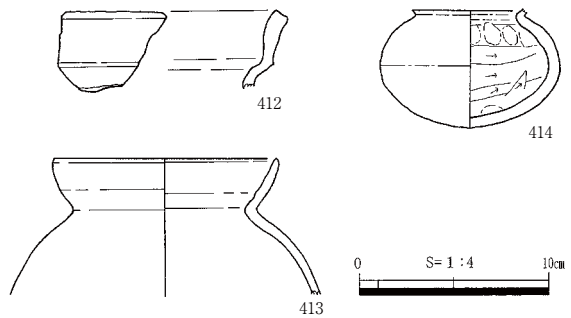
本遺構の性格は住居の可能性も残すが、規模が小さいこと、柱穴を持たないこと、台石を据えたピットを持つことなどを考えると通常の居住スペースではなく作業場的な性格がより強いと考える。

#### 竪穴建物7 (第114・115図、PL.19-2・49-5)

東区F12、G12グリッド、標高69.8mの緩斜面に位置する竪穴建物跡である。遺構はトレンチャーによる耕作痕が著しく、遺存状態が良いとはいえない。



第113図 竪穴建物6出土遺物



第114図 竪穴建物7出土遺物

平面形はほぼ方形を呈するが、規模は南北辺が4.2m、東西辺4.9mで東西辺がやや長い。床面積は約15㎡を測る。壁高は最大40cmで、壁際には幅10～18cm、深さ5～8cmの壁溝がほぼ全周している。西壁の壁溝のみが2重となっており、建物は一度西側へ僅かに拡張された可能性がある。また、南北の壁溝からP 2に向かって浅い溝が派生しており、仕切溝と考えられる。この仕切溝よりも東側の床面には貼床が10cm程の厚さで施されており、建物内部の空間が東西で使い分けられていた可能性が高い。

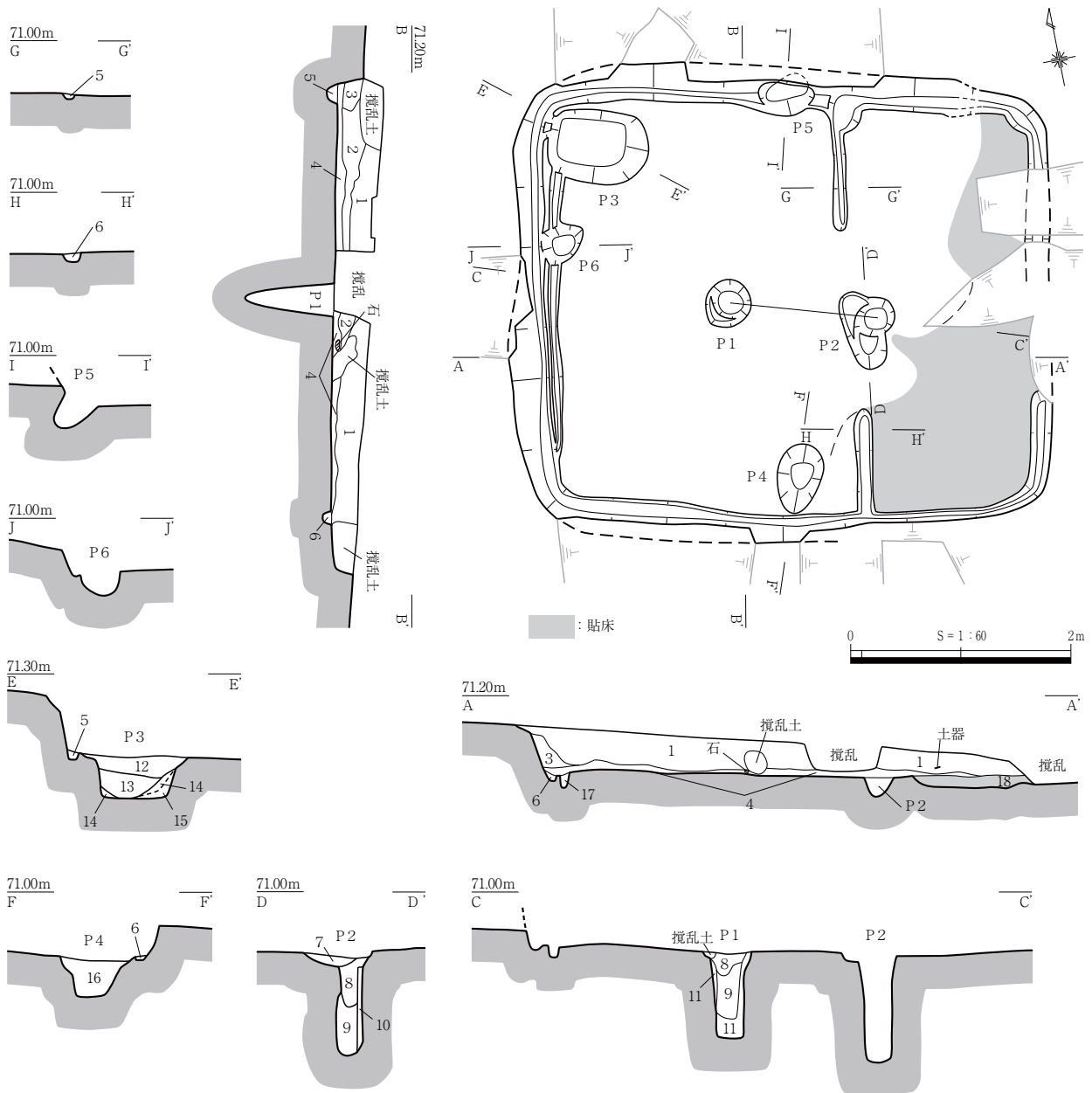
主柱穴はP 1とP 2の2基からなり、柱間寸法は1.4mを測る。柱掘方は30cm程の円形を呈し、柱の径は15～20cm前後に復元される。P 5は斜坑状に掘られており、いわゆる特殊ピットの可能性がある。P 4とは対になる位置関係から関連するものと考えられるが、具体的な機能は明らかにしない。P 3は長軸94cm、短軸62cmの方形の土坑状を呈し、深さは35cmで、屋内貯蔵穴などの性格が考えられる。

出土遺物は少なく、ここでは土師器3点を掲載した。412は甕の口縁部で、肥厚した口縁端部をもつ。413は布留系甕、414は小型丸底壺である。時期は出土土器が天神川Ⅴ～Ⅵ期に比定されることから、古墳時代中期と考えられる。なお、P 3から出土した炭化物を放射性炭素年代測定したところ $2\sigma$ 暦年代範囲で240calAD-359calAD (90.1%)という結果が得られ、土器の年代観とは齟齬が認められる。

#### 竪穴建物8 (第116・117図、PL.20-3・49-6,7・50-1)

西区K 33グリッド、標高66.0mの丘陵肩部に位置する竪穴建物跡である。遺構の南半は調査地外に広がっており、全容は明らかではない。平面形は一辺4.7mの方形を呈し、深さは最大1.2mである。

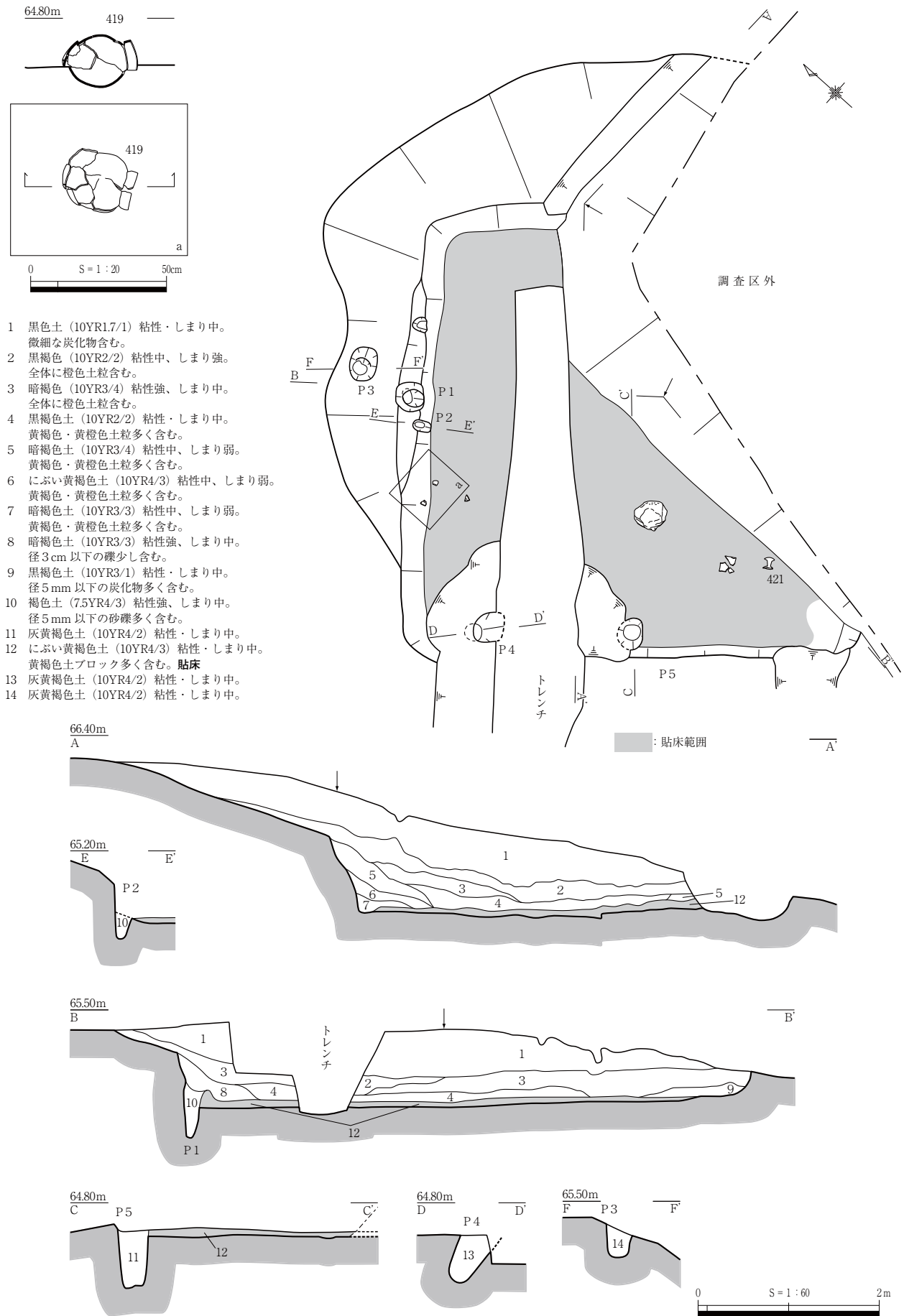




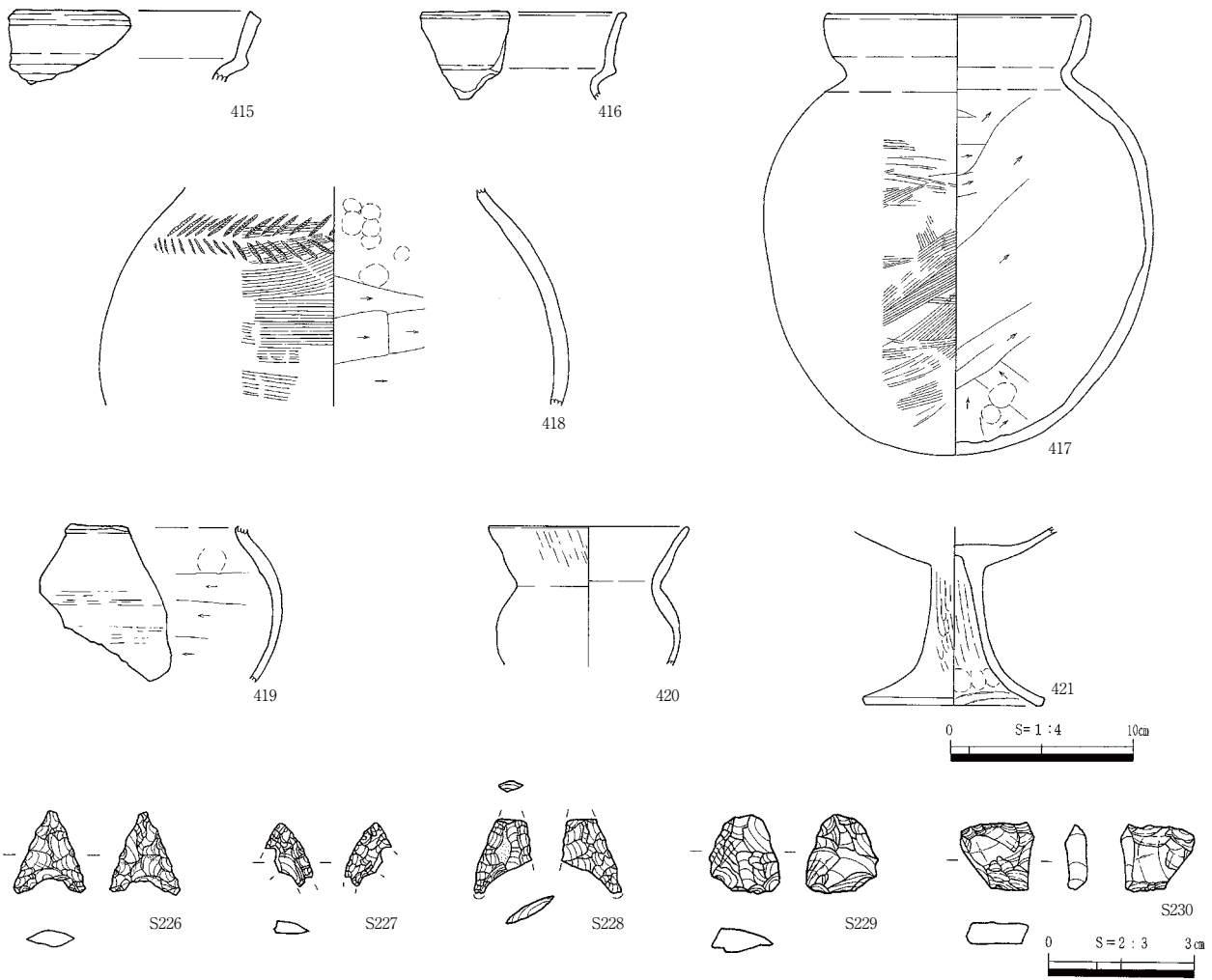
- 1 黒褐色土 (10YR2/2) しまりやや強、粘性弱。径5mmのAT粒、径1~1.5cmのロームブロック、径5mmの炭粒少し含む。
- 2 黒褐色土 (10YR3/2) しまり普通、粘性弱。径5mmのAT粒、径2cm以下のロームブロック多く含む。
- 3 黒褐色土 (10YR3/1) しまり普通、粘性ややあり。径5mmのAT粒非常に多く含む。
- 4 暗褐色土 (10YR3/3) しまり強、粘性やや強。径1~2cmのATブロック・ロームブロック非常に多く含む。
- 5 黒褐色土 (10YR3/2) しまり普通~強、粘性やや強~強。径5mmのAT粒、径1cmのロームブロック非常に多く含む。
- 6 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり強、粘性普通~強。径0.5~1cmのAT粒、径1~1.5cmのロームブロック多く含む。
- 7 黒褐色土 (10YR3/2) しまり・粘性普通。径5mmのAT粒、径1~2cmのロームブロック含む。
- 8 黒褐色土 (10YR2/2) しまり強、粘性やや強。径1~2cmのロームブロック多く含む。径0.5~1cmのATブロック粒少し含む。
- 9 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり強、粘性やや強。径1cmのロームブロック非常に多く含む。
- 10 明褐色土 (7.5YR5/6) しまり・粘性強。地山に酷似するが、やや暗い色調。径1~2cmの黒褐色土ブロック少し含む。
- 11 黄褐色土 (10YR5/6) しまり強、粘性やや弱。地山(AT)に酷似。径1~2cmの黒褐色土ブロック少し含む。
- 12 黒褐色土 (10YR3/2) しまり・粘性普通。径0.5~1cmのATブロック多く含む。径1cmのロームブロック少し含む。
- 13 暗褐色土 (10YR3/3) しまりやや弱、粘性普通。径5mmのAT粒、径2cmの黄褐色土ブロック多く含む。
- 14 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり普通、粘性やや強。径0.5~1cmのローム粒非常に多く含む。
- 15 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 地山に酷似。ロームブロック多く含む。
- 16 黒褐色土 (10YR3/2) しまりやや強、粘性普通。径1~2cmのロームブロック多く含む。
- 17 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり・粘性強。径5mmのAT粒、径1~1.5cmのロームブロック多く含む。
- 18 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) しまり・粘性やや強。暗褐色土とハードローム・ホワイトローム・ATブロックの混土。上層はとくにロームブロックが多い。

第115図 竪穴建物7

### 第3章 調査の成果



第116図 竪穴建物8



第117図 竪穴建物8出土遺物

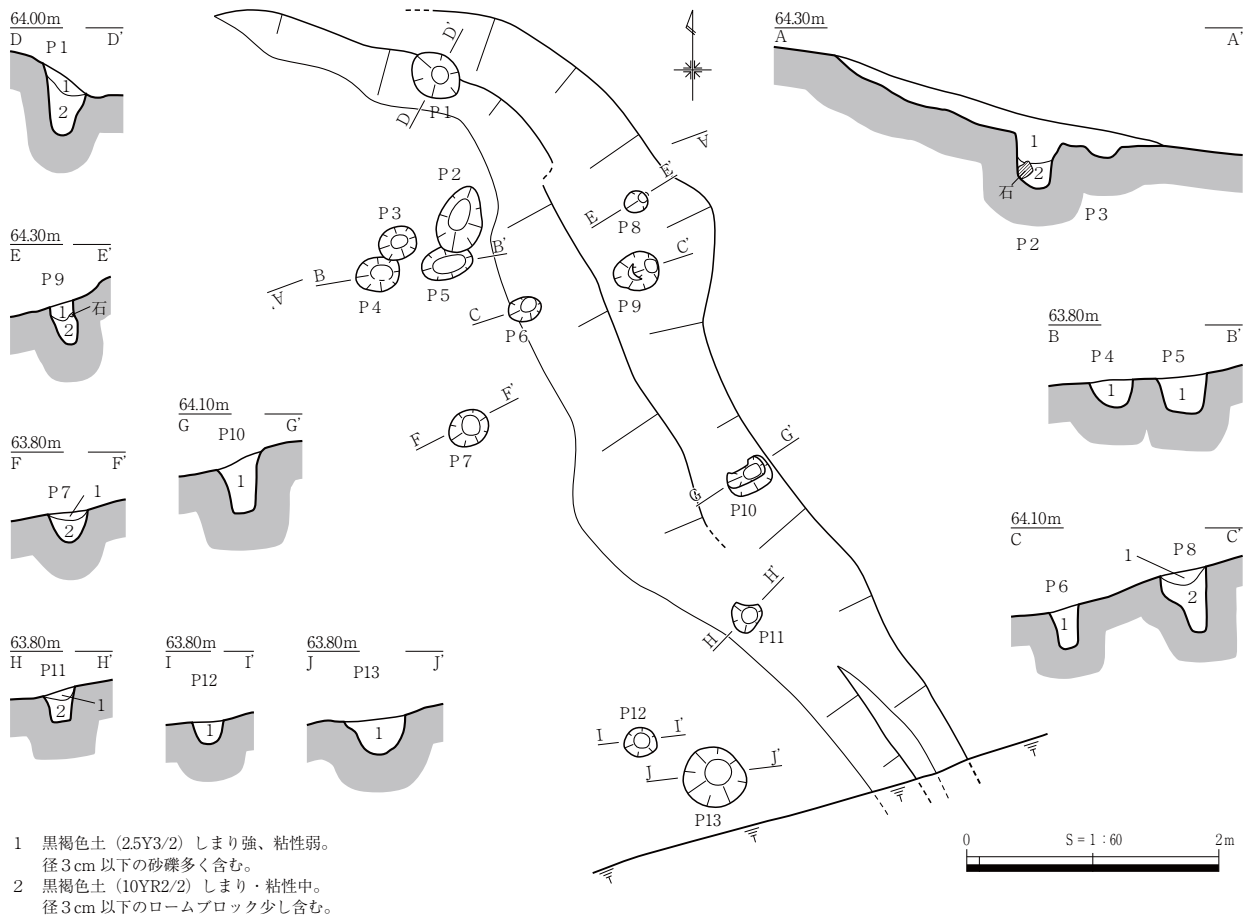
床面にはほぼ全面にローム土を主体とする貼床が施されている。壁溝はみられない。埋土は黒褐色と暗褐色土を主体とし、斜面上方からの自然堆積により埋没している。

西壁沿いの床面や北壁で計6基のピットを検出している。明確に建物の支柱穴といえるものはないが、P 1とP 5は各壁面の中央付近に配されており、調査範囲外の壁面にも対になるピットが存在する可能性もあり、やや特異な形態ではあるが上屋を支えた柱穴となる可能性もある。あるいは壁立式の構造であろうか。P 4は斜坑状の特殊ピットである。

遺物は北壁ほぼ中央付近から完形に近い土師器甕 417 が出土している。単純口縁の布留系甕で、底部内面には粗い指頭圧痕が残る。その他は南西隅の床面で土師器高坏脚部 421、甕 415、壺胴部 418、直口壺胴部 419 が、埋土から土師器甕口縁部 416、直口壺 420 が出土している。いずれも天神川ⅣからⅤ期に比定される。また、埋土上層にあたる1、2層からは黒曜石製石鏃 S 226～S 228、黒曜石製の楔形石器 S 230、剥片等が多数出土しており、上方の丘陵平坦部にある縄文時代の遺構から二次的に流入した石器と考えられる。

本遺構の時期は出土した土師器から古墳時代中期前葉と考えられる。

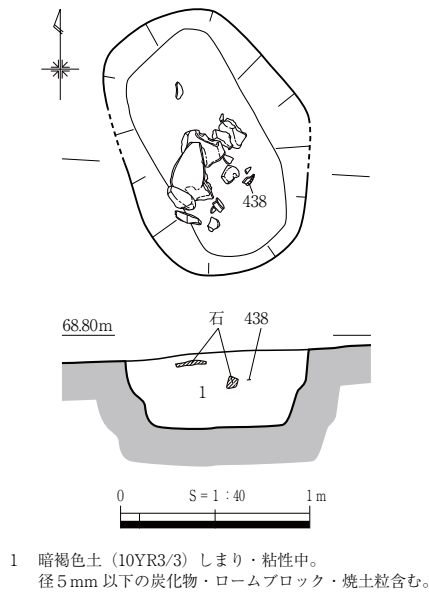
### 第3章 調査の成果



第118図 テラス2

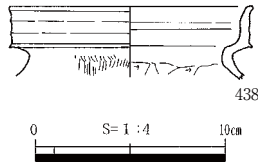


第119図 テラス2 出土遺物

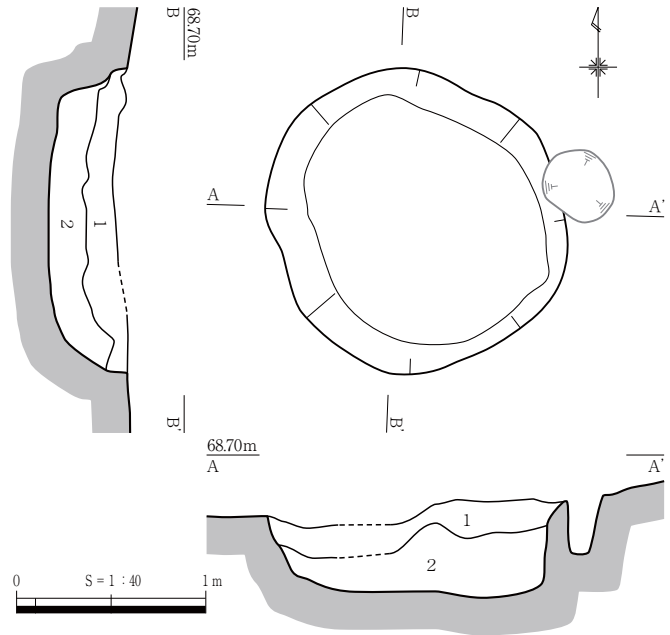


第120図 土坑13

1 暗褐色土 (10YR3/3) しまり・粘性中。  
径5mm以下の炭化物・ロームブロック・焼土粒含む。



第121図 土坑13出土遺物



第122図 土坑14

1 暗褐色土 (10YR3/4) しまり・粘性中。  
径3cm以下の黄褐色・橙色ロームブロック僅かに含む。  
2 褐色土 (10YR4/6) しまり・粘性中。  
径10cm以下の黄褐色ロームブロック多く含む。

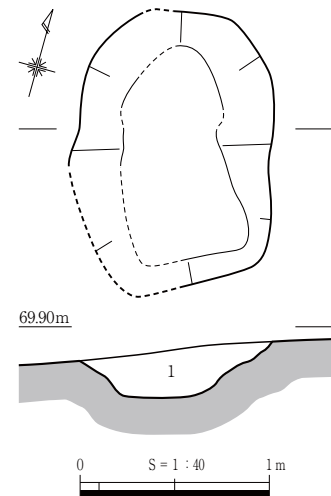
### 3 段状遺構

#### テラス2 (第118・119図 PL.50-1・55-2)

西区K 34、L 33グリッド、標高64.0mの谷部斜面に位置する。遺構の南側は調査地外に延びているため、全形は不明である。規模は長さ8m以上、幅2.5m、深さ0.2mである。埋土は黒褐色土の単層で、砂礫を多く含んでいる。床面にはピットが7基検出され、遺構肩部にも6基のピットがある。大半のピットは深さが浅く、断面観察で柱痕跡も確認できないことから上屋等は復元できない。

遺物は縄文土器や土師器、石器が出土している。図化したものには縄文土器422～436、土師器甕437、黒曜石製石鏃S 231～S 233、サヌカイト製石匙S 235等がある。縄文土器は422～424が燃糸文を施すもの、425～427が沈線文や刺突文を施すもの、428～432が縄文地に沈線文を施すもの、433・434が磨消縄文を施すもの、435・436が刻み目突帯文をもつものである。これらは里木Ⅱ式、北白川C式、中津式、突帯文土器様式期のもので、石器類と合わせ本来、丘陵平坦部に存在した縄文時代の遺構に伴う遺物が二次的に混入したと考えられる。

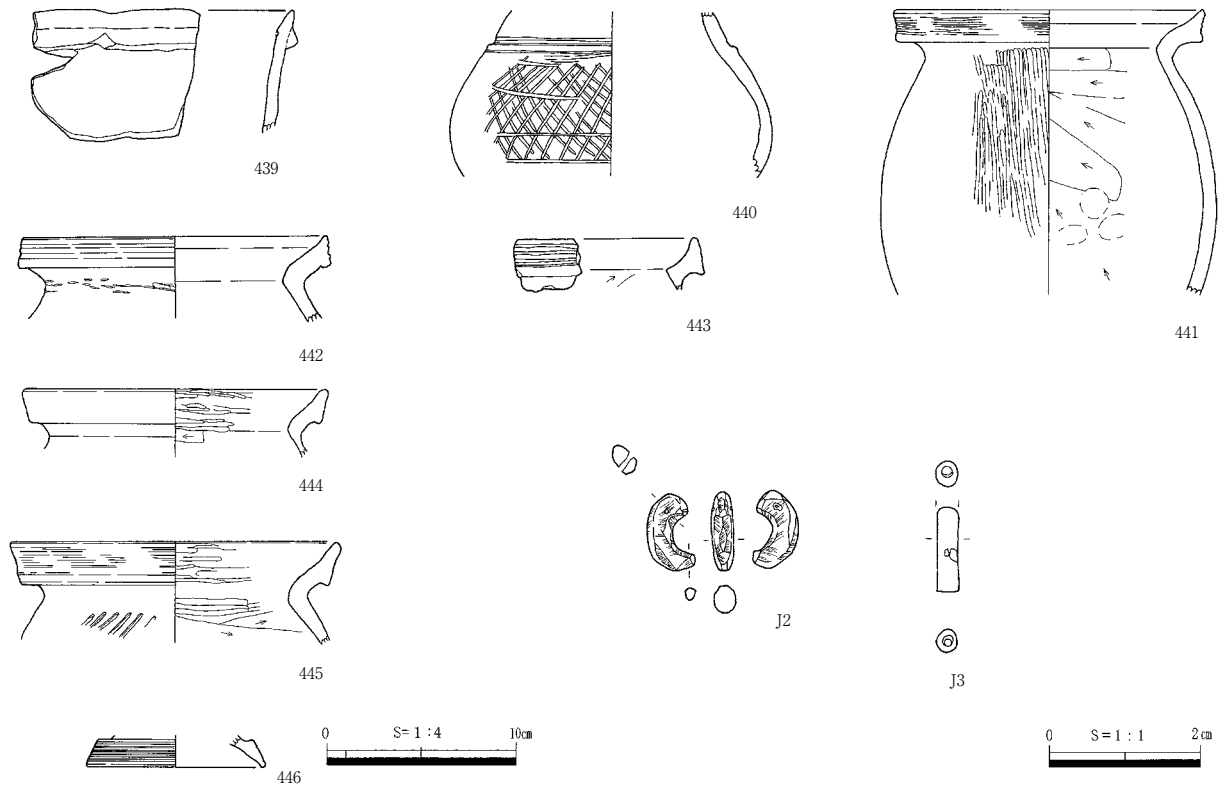
本遺構に確実に伴う土器は土師器甕437で、天神川Ⅰ～Ⅱ期に比定できる。よって、本遺構の時期は古墳時代前期前葉と考えられる。



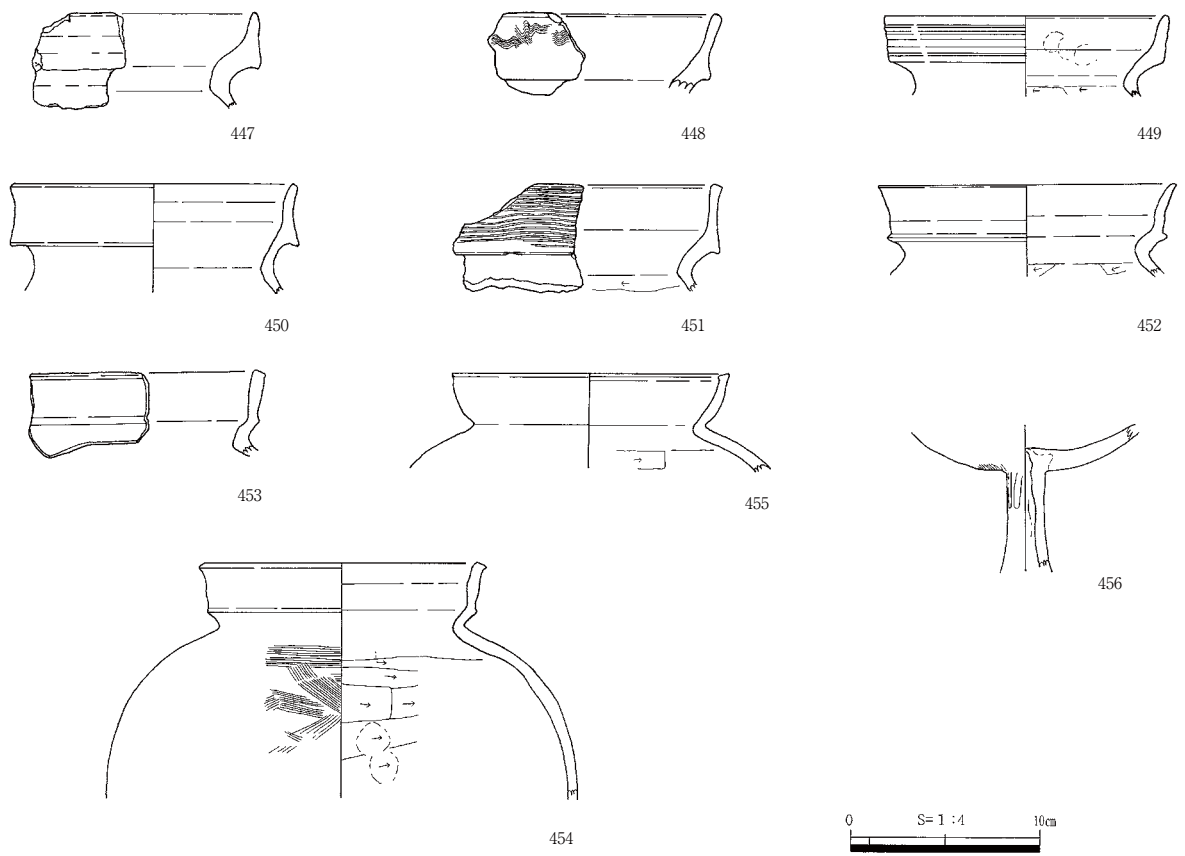
第123図 土坑15

1 褐色土 (7.5YR4/3) しまり強、粘性弱。  
径2cm以下の炭化物・ロームブロック・焼土粒僅かに含む。

東区



西区



第124図 弥生・古墳時代遺構外出土遺物



## 4 土坑

### 土坑 13 (第 120・121 図、PL.50-1)

西区K 31 グリッド、標高 68.7 mの丘陵平坦部に位置する。平面形は長軸 1.4 m、短軸 1.0 mの隅丸方形を呈し、深さは 0.4 mである。底面は平坦である。埋土は暗褐色の単層で、炭化物やロームブロック等を含んでおり、人為的な埋め戻しが考えられる。

遺構の中央付近では埋土から土器と共にまとまった礫が出土している。礫はいずれも角礫である。土器は縄文時代晩期後半の突帯文土器が 1 点混入しているが、その他は土師器である。438 は小型甕の口縁部破片である。

本遺構の時期は出土土器から古墳時代前期中葉から後葉と考えられる。遺構の形態や規模、埋土の特徴から墓壙の可能性はある。

### 土坑 14 (第 122 図)

西区K 31 グリッド、標高 68.5 mの丘陵平坦部に位置する。平面形は長軸 1.6 m、短軸 1.5 mのやや歪な円形を呈し、深さは 0.5 mである。底面は平坦である。埋土は 2 層に分層でき、下層の 2 層には地山ロームブロックが多量に含まれており、人為的に埋め戻された可能性が高い。遺物は出土していない。

土坑 13 に隣接し、埋土が類似することから、古墳時代の墓壙である可能性が考えられる。

### 土坑 15 (第 123 図)

西区J 30 グリッド、標高 69.8 mの丘陵平坦部に位置する。平面形は長軸 1.4 m、短径 1.1 mの楕円形を呈し、深さは 0.25 mである。断面形は皿状を呈する。埋土は褐色の単層で、微細な炭化物やロームブロック、焼土粒を含む。遺物は埋土から図化しえなかったが、鼓形器台の脚部片が出土している。

本遺構の時期は出土土器から古墳時代前期と考えられる。性格は不明である。

## 5 遺構外出土遺物 (第 124 図、PL.48・50-2・59-5)

弥生時代、古墳時代に帰属する資料は僅かしか出土していない。

東区はすべて表土や耕作土から出土した資料である。また、資料の大半が D 区、もしくは G 区の竪穴建物跡周辺から出土している。439 は突帯文土器の深鉢で、内面に刳圧痕が 2 箇所みられる。440 は壺の体部で玉葱形を呈し、外面には櫛描きによる格子状の文様が施されている。441～445 は弥生時代後期の甕で、446 は台付壺の脚部であろうか。J 2 は蛇紋岩製の勾玉で、C 区の竪穴建物 5 周辺から出土している。J 3 は碧玉製の管玉で、古墳時代の所産とみられる。

西区は平坦部Ⅳ層が当該期の包含層の可能性はある。455 は布留系甕で、453 とともに古墳時代中期に帰属する資料である。447～451 は表土から出土した資料で、447～451 は弥生時代後期、452 は古墳時代前期初頭の甕である。454、456 は縄文時代の包含層である谷部 V -1、2 層から出土しているが、出土位置からみて竪穴建物 8 からの転落品が下層に二次的に混入したものであろう。